胡堂賞

天使の声に魅せられて

宮城県古川黎明中学校 2年 崎野 寛太

中学校生活も折り返しを迎えたこの夏。自分にとって「音楽」とはどんな存在なのか。何のためにあるものなのか。そんなことを考える夏になった。

私は、幼稚園に通っている頃から現在まで、九年間ピアノのレッスンを続けていた。母が連れて行ってくれた親子体験教室がきっかけであったが、物心が付いて、初めてピアノに触れたときの感動は、この先忘れることはないだろう。あの頃の私には、自分の手からあんなにも綺麗な音が出ていることが信じられなかった。

この本の主人公である少年、森祐司も私と似たようなきっかけで音楽に触れることになる。元々クラシック音楽に関心を示していなかった裕司は、母と行った無料コンサートで聴いたフルートの音色に心を奪われた。その結果、祐司は国立音楽院のフルート科へ入学し、教授のサンティーニ先生のもとでフルートを学んでいくことになった。私は、この祐司とフルートとの出会いから、音楽の「人を魅了する底知れない力」を感じた。今まで音楽に興味を示していなかった祐司でさえも、フルートの音を「天使の声」と言うまでに、彼を虜にしたのだ。彼が初めて聴いたオーケストラは、ラヴェルの『ダフニスとクロエ』を演奏し、祐司に感動と衝撃を与えた。これは、私自身も経験したことのある希有な体験だ。一度虜になった人の心を驚掴みにする、音楽特有の不思議な力が働いているのかもしれない。では「不思議な力」とは一体何なのか。それは、音楽にのめり込む「きっかけ」を指すと同時に、音楽の道において「どんな進路を選択するか」ということだ。

祐司の母は、祐司を多くのコンサートに連れて行き、音楽の道へ進むように導いていたが、祐司が音楽に心を奪われたのはたったの一回だけだった。きっと祐司の母があんなにもしつこく祐司をコンサートへ連れて行ってなかったら、その「きっかけ」というものはなかっただろう。また、私が何よりも感動したのは祐司の決心の強さだ。たった一度の心を震わせるような演奏との出会いが、祐司を突き動かしたのだ。「やっぱりフルートを吹きたい。」

と強く思った祐司。それは彼にとって人生最大の決心であったと言っても過言ではないだろう。その決心は、帰りに母に買ってもらったアイスクリームのことなどすっかり忘れさせるぐらい衝撃的なものだった。

音楽は向き合う熱量が多ければ多いほど、難しくなってくるものだと私は思う。それは音楽に限った話ではないかもしれないが、祐司を見ていると、より強く感じられる。例えば、祐司にはサンドロという同級生と、ジャンフランコという先輩がいる。サンドロはフルート奏者の技巧派の鑑と言ってもよいほどで音楽院の生徒は皆、彼の技術を認めていた。また、ジャンフランコは素晴らしい音楽性をもつヴァイオリン奏者だった。この二人は、フルートの経験が浅く、国際コンクールの出場経験もない祐司をいつも馬鹿にし、どこか見下していた。彼らは幼い頃から恵まれた環境で音楽と過ごしてきたのだ。その一方で、祐司はシングルマザーの母が一生懸命働いたお金で、なんとか音楽院へ通わせてもらっているごく普通の学生だった。この状況は、今までに私も感じたことがある劣等感であり、自然と自分を祐司に重ね合わせていた。ピアノのコンクールで良い結果が出なかったときは、他の出場者ほもっと小さい頃から素晴らしいレッスンを受けてきたからだとか、我が家には手が届きそうもない高級ピアノでレッスンしているからだと言いつつ、明かしていた。しかし、上手くできなかったのは環境や楽器のせいではない。明らかにそこに至るまでの努力が足りなかったからなのだ、とこの本を読みながら回顧していた。

祐司はサンティーニ先生の指導や、夏の合宿で出会ったマエストロ・ビーニとのレッスンによって着々と腕前を上げていった。結果的にヤングオーケストラに入ることができた祐司だったが、彼が自信をもって音楽と向き合うことができたのは、彼を支えてくれる良き出会いの存在が大きかったのだろう。マエストロ・ビーニが祐司に話していた言葉は当たり前だが、ともすると忘れてしまいがちな言葉であった。「『楽しい』って漢字は、もともと音楽って意味なんだろう？知り合いの日本人に聞いたことがある。とにかく、音楽ってのは、楽しむもんだ。」そして、彼はその瞬間の自分なりの答えを表現することこそが「アドリブ」であり、音楽の美であることを、多くの出会いから学んだ。

そうだ。純粹に弾くのが楽しいと感じた音楽が私にもある。幼かった頃のように素直に感じて楽しんでいいのだ。音楽とどう向き合うか、その姿勢は誰かがきつと見てくれている。だから音に真摯に向き合い楽しもう。そんなことを祐司が私に教えてくれたように。

図書名 アドリブ
著者名 佐藤 まどか

審査員講評

胡堂賞感想文について

最初は純粹に楽しんでいた音楽。成長するにつれて、楽しいだけでは続けていけなくなる主人公の葛藤や迷いを、自分の姿と重ね合わせて、感じたことを素直に表現している作品です。

「アドリブ」を楽しむ崎野さんのピアノの音色が聴いてみたくなりました。

教育長賞

チャレンジ ―失敗は成功のもと―

紫波第一中学校 1年 鈴木 蒼惟

「失敗は数年経ってから振り返って笑えばいい。今はただ一生懸命チャレンジして、失敗して、少しずつ前に進んでほしい」本の中のこの言葉がとても心に残った。そして、失敗してもいいからどんなことにもチャレンジしてみようと思わせてくれる大切な言葉になった。

「青春サプリ。挑戦する気持ち」には、ダンス部や野球部などの実際にあった部活動の話が五話書かれている。その中で、特に女子バスケットボール日本代表の馬瓜エブリン選手の桜花学園高等学校時代の様子を書いた話がとても印象に残った。

馬瓜選手は「桜花学園での三年間がなかったら今の自分はなかった」と語っている。馬瓜選手はチーム一丸となって優勝するという目標に向かって、仲間とぶつかり合い、話し合いながら、常に明るくいることを忘れずに三年間を過ごした。オリンピックの試合で見た馬瓜選手の笑顔で仲間に声を掛けていた姿が思い出された。どんな状況にも負けることなく周りを明るく支えることができる人とはどんな人なのだろうと考えたとき、私は、プラス思考で物事を捉え、行動に移せる人なのではないかと思った。

では、どうしたらプラス思考で物事を考えることができるのだろうか。前向きな考え方をするためには、努力を重ねていくことで自分に自信をつけていくことが大事なのではないか。馬瓜選手は、がんばれば未来は変えられるという思いから、夜遅くまで仲間にアドバイスをもらいながら練習を続けたそうだ。そんな努力があったからこそ、試合でも自信を持ってプレーし、最後まであきらめずにできたのだと思う。また、馬瓜選手がいつでも前向きな言葉をたくさん使っていたこともとても大切なことだと感じた。その言葉が周囲を明るくし、力となる。私も普段の生活から前向きな言葉をたくさん使うことを心がけながら過ごしていきたい。

「何かに迷うときは、やりたいほうに進めばいいんです。」馬瓜選手が、これから生きる人々に向けて伝えたいと言っていた言葉だ。私は、中学校に入って、新しい環境での生活に戸惑うことや選択に迷うことが増えてきた

と感じている。新しい友達との関係や部活動、定期テストなど様々な新しいことがスタートした。新しい経験をする 것과同時に決断することの責任の重さも強く感じている。

私は小学校六年生のときに児童会長を経験した。初めての経験に、困ったこともたくさんあった。けれども、同じ児童会の人たちや先生方に助けってもらいながら、たくさんの方にチャレンジし、認めてもらえた良い一年になったと思っている。いろいろな行事の成功を裏方として支えることの苦労や大切さ、そしてやり遂げたときの大きな喜び、達成感を味わうことができた。また、この経験から感謝の気持ちも大きくなった。

昨年、私の小学校では創立一五〇周年を迎え、記念行事が行われた。その中に私たち児童会が企画した「みんなの夢灯り」がある。全校生徒にアンケートをとって企画し、先生方と何度も話し合いを重ね、準備には地域の方たちにも協力していただきながら進めた。当日の司会進行もすべて自分たちで考えた。全校みんなの夢が書かれたキャンドルに灯りがともったときの光景の美しさは忘れられない。そして何よりも、全校のみんなが楽しんでいたことが、今までやってきてよかったと思わせてくれた。馬瓜選手の言葉からそんなことを思い出した。その経験と言葉が結びつき、大きな実感として体の中に入ってきたように感じた。

新たなことに挑戦するときには「もし失敗したら」という不安が生まれる。できれば失敗は回避したいと思い、チャレンジをためらうこともある。しかし、失敗ばかりを恐れて何もしないでいたら、こんな体験はできなかった。上手くいかなかったとき、失敗を悔やむことを回避できたかも知れないが、それ以上の大きな感動を得ることはできなかった。そう考えると馬瓜選手の言葉が心に響く。

この本を通して、一生懸命チャレンジすることは、自分を高めること、そして夢や目標に向かう大きな力になることを学ぶことができた。「失敗は悪いこと」というネガティブな考え方を変えてくれた。たくさん失敗して、その経験を力にしながら前に進んでいきたいと強く思う。そして、馬瓜選手のように明るく、仲間を大切に、笑顔で充実した中学校生活を送っていきいたいと思う。これから先、たくさん迷うことや、チャレンジすることに對して不安が生まれることもあると思う。そんなときは「何かに迷うときは、やりた

いほうに進めばいい」という言葉を思い出して、自分の気持ちに正直に前に進んでいこうと思う。

図書名 青春サプリ。挑戦する気持ち
著者名 文：オザワ部長、青木 美帆、日比野 恭三、
田中 夕子、菊地 高弘
絵：くじょう

優秀賞

障がいをもつ家族とのかかわり

紫波第一中学校 3年 岩瀧 心咲

「明日は誰もどうなるか分かりません。一度きりの今日を大事に」この本を読み終えてこの言葉が心に残りました。私はあらためて家族の在り方について考えました。

私には障がいをもつ家族がいます。私の今までの生活の中で、その家族が自分の生活の中心を占めるくらい大きいと感じています。

この本は、障がいをもつ人を身内にもっている方の実体験が書かれています。家族をどのように支援していったらよいか、色々な組織の方と連携しながら活動を行い、どのような社会づくりが必要かを真剣に考え、追い求めていくものでした。同じ障がいをもつ家族として、私はこの体験談にはとても共感しました。これから私の体験とずっと抱いていた思いについて書きたいと思います。

数年前、動物園に家族で行った時のことです。色々な動物を見て回っている時、すれ違う人や周りにいる人たちが、私たちの方をジロジロ見してきました。おそらく家族が障がいをもっているからなのかもしれませんが、とても嫌な気持ちになりました。障がいの程度は障がい一級で自分の意思で歩く事も話すこともできず、移動の時は特別な障がい者用の車イスに乗っているので、かなり目立ちます。それから家族と出かけることはあまりしなくなりました。

障がいをもっている家族が身内にいると、家族は当たり前のように支援者になります。家族の負担はとても大きいと感じます。介護の経験がない人には、なかなか理解してもらえないかもしれません。例えば、食事をするときにスペースが狭かったり、建物の中に段差が多かったりすると、行動の妨げになります。その都度、介助や、お世話をしなければなりません。これが当たり前なのです。私は、障がいをもつ家族を支援する仕組みがこの社会には整っていないのではないかと感じていました。

この本は、「障がい」のある人の家族を「きょうだい」と言っています。

作者は、障がいのある弟のお姉ちゃんとして育ちました。最初はひとり娘でしたが、その後、三歳下の弟が生まれて、「お姉ちゃん」になりました。そして、弟の耳が聞こえないことが分かり、五歳のときに「聞こえるお姉ちゃん」になったのだそうです。「きょうだい」には「障がいのある人や親を助ける立場」「優しい」というイメージがありますが、表面上は明るく微笑んでいても、誰にも言えずに傷ついていたり、切実な悩みを抱えていたりして助けが必要な時もあります。そんな時に「きょうだい会」という組織が助けになったと知りました。同じ立場の先輩や家族の支えがあり、意見を言い合える場があることで、作者が次第に明るくなっていく姿が印象的でした。人との関わりの中で、作者が「障がいの有無にかかわらず、互いが対等の関係でいたい」と言ったことにとっても感銘を受けました。「互いに我慢せず、遠慮なく自由に話したい」という思いを家族で共有できるようになってからは気持ち良く暮らすことができているのだと思いました。

自分や周りの人が困っている時に、声を上げることができる社会は、誰にとっても生きやすい社会だと思います。障がいの種類、さまざまな家族関係や状況の中で、「対等」の内容は考え続けていく必要があります。そして、家族内の問題としてだけではなく、社会の課題として、対話と共感が大切だと思います。また、親や身内が障がいのある子どもを考えて「きょうだいがいるから安心」とか、「将来はよろしくね」と身内に家族の世話を託そうとする例は少なくありません。障がいのある兄や姉を守ったり助けたりするために生まれたのだとショックを受けることもあります。人間は生まれてきた以上、「幸福追求権」「自己決定権」として、「自分が望む幸せは何か」「自分がどこで、誰とどう生きたいか」等を自分で決める自由や権利をもっていきます。兄弟姉妹同士は互いの人生の負担や縛りになる存在ではないのです。それぞれが自分の人生を歩んでいくことが大切なのではないでしょうか。

この本を読む前は、自分は我慢しなければいけないし、家族のためだから手伝ってあげるのが当たり前だと思っていました。しかし作者が色々な人と関わって自分なりの頑張り方で障害のある人もない人も皆が快適に暮らしているように努力している姿から勇気をもらいました。私は、悩んでいる

ばかりいるのではなく、周りの人と協力して話し合うことが大切なのだとは思っています。これから先、家族の障害のことで困ったことがあっても、周りの人と助け合っていきたいです。

学校生活の中で、私は周りの人に助けてもらったことはあっても、それを見せていないということに気づきました。これからは、周りの人を助けてあげられる人、家族を大切にしたい人になりたいと思います。

図書名 「障害」ある人の「きょうだい」としての私
著者名 藤木 和子

優秀賞

私が誰かに寄り添える日まで

紫波第一中学校 3年 霜上 聖奈

「あなたの言葉は、大人になった時のあなたにとっての武器になる」この言葉が私の心に残っている。私は会話をするのが得意ではない。自分のことを相手に話したり、友達の話を聞いたりすることは好きだ。しかし、大勢での会話となると、会話のペースについていけず、自分だけが取り残されたような感覚に何度もなってしまうのだ。私は、「自分を表現しなさい」というニュアンスの言葉が嫌いだった。正直に言っていると、私はその言葉の意味がよく分からない。いや、「分かりたくなかった」のだ。自分を表現する大切さは、身をもって知っていた。だが私は、まるでその言葉が「私のやり方は間違っていて、今までの時間は無駄だった」と言われているようで、怒りと悲しみでよく分からなかった。これが本を読む前の私だ。自分を表現できず、周りに流されてしまう私。

「あなたの言葉を」この本は、題名の通りに「あなた」の「言葉」を見つける手伝いをしてくれる本である。筆者の体験談を交え、身近にある例を挙げて、自分の手でそれを見つけた。身近な例として「水泳」が挙げられる。私は「水泳」については、「普通」という回答をした。しかし、こんな場合はどうだろう。私の友達がみんな「水泳が大好きだ」と言ったとしたら…。自分の気持ちを正直に言うのか、それとも周りの空気を読むのか。私は後者を選ぶだろう。空気とは繊細で、私達を動けなくしてしまうのだ。周りに足並みを合わせ、周りに後れをとらないようにと必死に追いつこうと努力する。それは決して悪いことではない。むしろ、良いことである。しかし、周りに合わせなければならぬという圧力が私たちの身の回りに潜んでいる。周りを見ずに先へと走れば、やがてはいじめの対象に。周りから遅れてしまえば、見下しやかからかいの対象になる。だから私は、「周りに合わせればよい」と思うようになっていた。負担になるのは自分だけ。「自分が我慢すればいいから」自分のちっぽけな犠牲が、人間関係を崩すことなく、すべてを円滑に進められると今までの経験から学んでいた。しかし、そこにも限

界はある。自分を犠牲にし続けていれば、いつかは自分が壊れてしまう。だから、自分を含めて私達は、上手な心の守り方を学んでいかなければならないと思った。筆者は私達に、「自分が納得できたことや、悩んで考えぬいたことを自分で表現できるようになってほしい。」と訴えているような気がした。この筆者の訴えは、大切な心を守るために大事なことだと私は思うのだ。

この本は私の見方を変えてくれた。だが、やっぱり自分を表現することは難しい。自分が思ったことを素直に口に出して言えるようになるのは、もっと先になるかもしれない。それでも少しずつ頑張りたいと思う。私たちは常に「正解」を選びたいと思ってしまう。それは、「正解」という言葉に対する私たちの共通認識であり、一般的に正しいこととされているからだ。「正しい」とは、誰もが良いと感じる。だからこそ、正しさを拒絶する人はいない。逆に、拒絶したとしたら、「変なヤツ」というレッテルを貼られて終わる。そういう人を私は何人も見てきた。たった一つでも間違えると、「不正解」になってしまう怖さ。自分のこれからを危うくするより、誰だって安全な道を歩きたい。だからこそ、空気を読んで絶妙な行動をとるのだ。「あの人はカッコいい」と誰かが言ったなら肯定する。自分だけ買うのは気まずいから、誰かが買ったなら自分も買う。そうやって、その場をやり過ぎす日々。いつしか、自分の考えも表現方法も、周りの空気に混ぜられて。溶けて。消えて。思い出せなくなってしまう。今の私だった。

しかし、本を読んで気づいたことがある。「私は私でいいのだ」と。自分の曖昧な表現も答えを必死に探そうとする自分も、それが今の私なのだと。自分を受け入れられた。やっぱり人は人だから、誰かを恨むし、嫉妬だって日常茶飯事だ。でも、だからと言って個人が脅かされるのはおかしい。私は私。あなたはあなたで良い。自身のあり方を最終的に決めるのは自分だ。だから、私は私の一番の理解者でいられるよう、自分と向き合いたいと強く思ったのだ。私達が産まれた時は赤ちゃんで、成長すると子供になる。素直な言葉で表現し、時には家族を笑わせてくれたであろう。しかし、大人になればどうだろうか。綺麗な心は濁り始め、いつしか空っぽの自分だけがそこに残った。空っぽになりたくてなった訳じゃなかっただろう。大人だって子供だって、人生経験の差はあれど、楽しいという感情や苦しいという感情達と

上手に付き合ってきただろう。何回、何百回、何千回と傷つき泣いたのだろうか。空の青さや雨の日の水溜まりの楽しさを、未来の私は覚えてくれているのだろうか。先が見えない未来は怖いのだ。もういつそのこと、「人生攻略本」があれば良いのにと何度も思ってしまう。だが、そんなものはこの世界に存在してくれないのだ。私達が求める「正解の道」は、誰かが過去に通って、私達に示してくれた道の一つに過ぎない。私達が色々な道を歩まずにして、「正解」も「不正解」すらも分からないだろう。「自分にはできない。」と言って、やらなかったことを後悔するよりも、当たって砕けて涙を零したほうが後悔する苦しさよりも苦しくはないはずだ。私は私を生きることに決めた。みんなもみんなの人生を歩けるように、私は勝手ながら願いたい。そして私は、思ったことを素直に口に出して言えるようになりたいと強く思う。「私の言葉」が、誰かに寄り添うことができるその日まで、自分の心に向き合い続け、これからを歩んでいきたい。

図書名 あなたの言葉を
著者名 辻村 深月

入 選

人間の全ては、「じんじん」に

紫波第三中学校 2年 北條 詩民子

美しい情景が印象的な物語だった。「青空の色がきらきらと目を射るように痛烈な色を私の顔に投げつけた」そう表された日に「私」と「先生」は出会った。

「先生」は毎月、雑司ヶ谷の墓地に友人の墓参りへ出かけていた。「私」は「先生」に雑司ヶ谷の墓地に眠る友人について質問をするが「先生」は何も教えてはくれない。「先生」には、その友人との間に暗い過去があったのである。そして、「先生」は自身の過去の罪をつぐなうため、ずっと、死に時を待っていた。

誰もが抱いたことがあるだろう、罪悪感。そして、罪悪感と対のような形で描かれるエゴイズム。どちらの感情も、我々が人間であるために持つ人間らしさだと私は思う。「先生」は自身の罪を自白するべきだと分かっているが、ずっと話すことができなかった。それは、もし罪を自白したら愛する人が離れていくと分かっているからだ。「先生」は自身のエゴに負けたのだ。さらに、あとからは罪悪感がおそう。私の心にもエゴがある。だから、もし私が「先生」であつたら、「先生」と同じ行動をとるに違いない。「先生」と同じように罪悪感で苦しむに違いない。でも、私には罪悪感と共に生きる強さがないから、先生のように生きられないと思う。作中でも「いちばん楽な努力(罪をつぐなうため)で遂行できるものは自殺よりほかにない」と「先生」は語っている。それでいて、「先生」は生きる道を選んだ。「先生」は「死んだつもりで生きていくことを決意した」のだ。しかし、死を決意して生きる「先生」は人間らしくないように感じる。いきいきとしていないのだ。「先生」はもっと人間らしい人だった。罪悪感が「先生」を変えてしまった。たった一度、自身のエゴに負けたから。

エゴに負けるのは、けして「先生」だけではない。私も負ける。あなたも負ける。全ての人が自身のエゴに負ける。「先生」のような状況はだれにだって起こりうる。だから、エゴを捨てるということではない。エゴはけして

悪い思考なのではない。むしろ、エゴは私たち人間が当たり前に持つ、本能のようなもので、人間らしさと言っているのではないだろうか。しかし、エゴは人間の弱さでもあるように思う。全世界でSNSが活発な今、他人とのコミュニケーションで自身のエゴは大きな障害となるだろう。私たちはエゴを上手に制御できるようにならなければいけないと思う。

人間には「胸の中に設置された複雑な機械」があるようだ。それこそが「こころ」であるようだ。一人一人がまったく異なる「こころ」を持っているようだ。おそらく、その「こころ」が私たちの全ての根元だ。私たちは「複雑な機械」なんだ。しかも理解することが困難な、とても難しい機械なんだ。

だから、「先生」は苦しんだ。「先生」は自分のことさえ十分に理解することができていないようだった。「先生」の「こころ」の中にあるエゴイズムと罪の意識は矛盾していた。その矛盾は「先生」の行動に出ていた。私たちは、体のどこにあるかも分からない、「こころ」によって苦しみ、喜び、争い、愛し合い、生きている。私のエゴも、罪悪感も全て、「こころ」が生み出したものだ。

私たちの全ては、「こころ」にある。人間らしさも、人間の弱いところも、全て「こころ」にある。私は夏目漱石の「こころ」を読んで、「先生」の思想にふれて、そう考えるようになった。人間の全てが「こころ」にあるなんて考えはありふれたものかもしれない。しかし、私にとっては、革新的であった。

私は「先生」にとっても感謝している。今までもずっと身近であった「こころ」が素晴らしいと気づかせてくれた。そして、「こころ」がどのようなものなのか、私はもっと知りたいと思った。そのためには、「先生」の思想にふれ続ける必要がある。

私は夏目漱石の最高傑作と言われる「こころ」を、もう一度、手に取った。一ページ一ページを「こころ」に刻むようにしてめくった。「先生」の思想は、やはり素晴らしかった。

ふと、窓の方に目をやると、「青空の色がぎらぎらと目を射るように痛烈な色を私の顔に投げつけた。」